《論文》

文学作品に見るスピリチュアルペインの顕れ
―死によってのみやわらぎ得るスピリチュアルペイン：芥川龍之介の『歯車』を手がかりに―

小林　和夫

はじめに

近年、スピリチュアルペイン（spiritual pain）とそのケア（spiritual care）に関わる臨床、研究、教育が活発化している。2007 年には「日本スピリチュアルケア学会」が設立され、12 年からは同学会による「スピリチュアルケア師」資格認定制度も設けられた。緩和ケアやホスピスケアの現場では、スピリチュアルペインを同定し、その尽きせぬ痛みをやわらげるための営々たる努力が、今この瞬間も小止み無く続けられている。

ところで、痛みというものは、その人に特有・個別のものであり、〈わたし〉の痛みを〈あなた〉が同じように感じることは、近未来に「共感共苦共痛機械」でも発明されない限り、おそらくはあり得ない。ましてスピリチュアルペインは茫洋として捉え所のない痛みである。おおまかな概念規定は存在し、痛みのカテゴライズもさまざま行われ、アセスメントが試みられて、現時点で最善と思しきケアが模索されている。しかしそこには千差万別の痛みの顕れがあり、カテゴライズによってかえってすくい取られぬまま沈潜し、秘匿される痛みもある。あるいは、あらゆる方途、技術、経験、知識、愛、祈りによっても、決してやわらげることのできぬスピリチュアルペインもあるのではないか。

本論では、芥川龍之介の『歯車』という文学作品の内に、死をもって免れ得るスピリチュアルペインを看取していくこととする。換言すれば、ただ死のみがやわらぎとなるスピリチュアルペインが、確かにそこに在る、

といえるだろう。

Ⅰ．スピリチュアルペインとは何か

死によってのみやわらぎ得るスピリチュアルペインの顕れを考察する前に、まずはスピリチュアルペインの概略を記しておく。

1．スピリチュアルペインの成立

スピリチュアルペインは、主としてターミナルステージにおける医療現場、とくに緩和ケア、ホスピスケアにおいて認知されるようになった痛みである。

現代ホスピスの始まりとされる聖クリストファー・ホスピスを1967年、ロンドンに設立したソンダースは、死を前にした人が感じる痛みを、〈身体的な痛み（physical pain）〉に加えて、〈社会的痛み（social pain）〉、〈精神的痛み（psychological pain）〉、そして〈スピリチュアルペイン〉が複雑にからみ合った〈全人的な痛み（total pain）〉と捉えるべきとの考えを示し[(1)]、以降、スピリチュアルペインのケア、すなわちスピリチュアルケアが欧米のホスピスを中心に広がっていく。日本でも80年代に入ると、ターミナルステージにある人に対するスピリチュアルケアが宗教系の医療機関などで行われるようになった。

1984年にホスピスケアを開始した淀川キリスト教病院の『緩和ケアマニュアル』では、「末期患者は否が応でも人生や自己の存在の意味に悩み、改めてそれまでの人生や自己の在り方を振り返り、人生の締めくくり方を考えざるを得ない状況におかれる」とし、「これらの苦痛は単なる精神的な痛みを越えた“魂の叫び”、自己存在の意味や価値に関わるより深いレベルの痛みととらえることができる。これらは“スピリチュアルペイン（霊的な痛み）”と言われ、単に宗教的なニードだけにとどまらず、すべての患者に出現すると言われている」[(2)]と説明している。

2. カテゴライズされるスピリチュアルペイン

では、スピリチュアルペインは、具体的に、どのような痛みと見なされているのだろう。

多くの医療機関、医療者（医師、看護師、コメディカルに加えチャプレンなどスピリチュアルペインのケアにあたる宗教者も含む）は、臨床の現場で、死に近接する人たちのスピリチュアルペインをアセスメントし、もってケアする手立てとするため、その痛みをいくつかのタイプに類型化する試みを続けてきた。

淀川キリスト教病院では、スピリチュアルペインの表出内容として、①“生きる意味への問い”（たとえば、「こんなになって、生きていてもしようがない」などの言葉となって表出される痛み。以下同）、②“苦難に対する問い”（「私だけがなぜこんなに苦しまなければならないのか」など）、③“希望がない”（「どうせ死ぬんだから、頑張ってもしかたがない」など）、④“孤独”（「こんな私を誰も助けてくれない」など）、⑤“罪責感”（「私が悪いことをしたから、こんな病気になったのか」など）、⑥“別離”（「家族ともう二度と会えなくなるのか」など）、⑦“家族に迷惑をかける”（「こんなに迷惑をかけるなら、早く死にたい」など）、⑧“死後の問題”（「死んだら私はどうなるのか。無になるのか」など）の８種に分類している[(3)]。

米国の緩和ケアマニュアルも、①“希望の喪失”（「もはや未来などない」など）、②“意味の喪失”（「こんなことが私に起こったのがわからない」など）、③“価値の喪失”（「ずっと寝たきりなんて、私は無価値だ」など）、④“関係性の喪失”（「家族と会えないなんて耐えられない」など）を、スピリチュアルな苦しみの表出形態として掲げている[(4)]。

もう少し見てみよう。

村田は、「終末期がん患者のスピリチュアルペインを『自己の存在と意味の消滅から生じる苦痛』と定義」したうえで、「将来の喪失（時間性）、他者の喪失（関係性）、自律性の喪失（自律性）から生じる苦痛であると解明」[(5)]したと著した。このいわゆる「村田理論」は、多くの医療現場で

参考とされている。また、スピリチュアルケアの第一人者で神学者の窪寺は、「スピリチュアルペインとは、人生を支えていた意味や目的が、死や病の接近によって脅かされて経験する、全存在的苦痛である」とし、「スピリチュアルペインをカテゴリーに分類すると、そこには①心理的要因（不安、憎しみ、無力感など感情・情緒的要因）、②哲学的要因（「なぜ……」懐疑、生きる意味、苦悩など）、③宗教的要因（死後のいのち、裁き、罪責感など）などが含まれる」[(6)] と指摘した。

おぼろげながら、スピリチュアルペインという痛みの相貌が見え始めてくる。

それが、何らかの理由によって死に近接することから生じる痛みであること。死に近接することで、自己の継続性、一貫性、同一性の一部、あるいは全体が瓦解すること。自己の継続性、一貫性、同一性が奪われることにより、自らの存在意義や生きる意味、希望が霧消して、かつ誰もが経験し得ない死後の世界への言い尽くせぬおそれが現前し、あらゆる飾りや衣服を脱ぎ去った裸の自己が問い直されること。かくしてこの痛みには問いが生じる。例示するなら、「なぜわたしは生まれたのか」、「なんのために生きてきたのか」、「どうしてこのような苦しみを受けねばならないのか」、「この苦しみに意味はあるのか」、「神よ、あなたはそこにいるのか」、「いるのならなぜこんな目に合わせるのか」、などというものである。容易にわかることだが、そこに明快な、釈然とする答えなどは存在しない。答えのない問いを問い続ける苦しみも、またスピリチュアルペインと考えられる。

Ⅱ．死のみがやわらぎとなるスピリチュアルペインの一考察

このように多様なスピリチュアルペインを、臨床医学や看護学とはまた別の角度から私は探求しており、本論では、スピリチュアルペインの顕れを、「文学作品」という「記された言葉」のうちに看取することとした――ここでの文学作品とは、作家と呼称されるに遜色ない人によって著された小説、戯曲、詩歌等々を指す――。今回、芥川龍之介『歯車』のテクスト

を検証しながら、そこに命脈の途絶をもってのみ癒されるスピリチュアルペインの存在を考えてみたい。

1. なぜ、芥川龍之介の、『歯車』、であるか

なにゆえ死する運命にあるのか、生の意味とは何か、ということは人間存在の根源的な問いの一つであり、それゆえ世界文学はこの死生の深淵を覗かざるを得ない。

日本文学史を溯行してみても、平安時代初期に成立した物語文学の嚆矢、『竹取物語』に見られるかぐや姫の召天説話に、すでにして運命的な別離、死生の妙が描かれている。

「今はとて天の羽衣きるおりぞ君をあはれと思ひいでける」[7]

かぐや姫が召天直前、帝に残した最後の手紙に記した歌（「いよいよ最期のこのとき、天の羽衣を着たとたんに、私は人間らしい物思いの感情を失ってしまいますが— 帝、今はあなたのことをしみじみ思っております」）には、異界へと戻らんとするかぐや姫のスピリチュアルペインが含蓄されているとは考えられないだろうか。

伊藤による、「死または無を意識する時に生命が理解され、私たちの存在が明らかに認識される、という方法は、日本の芸術家が好んで使う方法」[8]との指摘を待つまでもなく、古典から近・現代文学に至るまで、死生を通して実存を探求する作品は数多存在している。

こうした中、なぜ芥川の『歯車』であるべきか、まずは詳らかにしておきたい。

芥川龍之介（1892-1927 年）は、『今昔物語集』に材を取った『鼻』、『羅生門』や、『宇治拾遺物語集』を典拠とする『地獄変』などのほか、『奉教人の死』のようなキリスト教に依拠する作品、いわゆる切支丹物などを多数著した後、1927 年 7 月 24 日、東京田端の自邸で劇薬を服用し、自死した。枕頭には聖書が置かれていたという[9]。享年 36。

大正期を代表する作家とされる芥川だが、死後90年という儼然たる時のフィルターに濾過されてなお、澱となってうち捨てられるどころか、近年、その評価が芳しく高まっている。英語圏では2006年に英国の老舗出版社がペンギン古典叢書の一冊として芥川のアンソロジーを刊行した。現代アジア作家としては最初の同シリーズ入りで、他にも近年、ロシア、中国、韓国などで全集、作品集が出版され、翻訳は世界40ヶ国を上回る[10]。

その芥川の、最も死に近接した作品の一つが『歯車』である。自筆原稿の記述を見ると、『歯車』の脱稿は1927年4月7日、自死の3ヵ月以上前ではあるが、実はその日芥川は、妻の友人である平松麻素子と心中するため、「妻に〈さよなら〉と言い残して、帝国ホテルに向かったのである」[11]。結局かかる行為は未遂に終わったが、『歯車』は芥川にとって〈絶筆〉の思いを託した一作と言える。

ペンギン古典叢書の『*Rashomon and Seventeen Other Stories*』を編んだジェイ・ルービンはこう記している。

> 「歯車」の語り手は世界が自分を滅ぼそうとしていることに気づいている。「地獄変」の頃、芥川は下調べを十分に行なった上で完璧に再創造した世界を構築することができた。今回、ずたずたになった神経はこの贅沢を許してはくれない。それ自体が地獄—本物の地獄—なのであり、我々は痛ましい姿に魅入られてしまう。芥川自身には結局耐えきれないほどのことだったと知りつつも[12]。

また同書の序文では、村上が本作を以下のように評している。

「この『歯車』という作品の中には、自らの人生をぎりぎりに危ういところまで削りに削って、もうこれ以上は削れないという地点まで達したことを見届けてから、それを改めてフィクション化したという印象がある。すさまじい作業である。」[13]

あるいはまたこうも。

「もっともそれは、ただでさえ傷つきやすい芥川の精神にとって、とても健全とは言い難い作業であった。〈……〉それらの作品を書くことが、結果的に彼の命を縮めたといっても過言ではないだろう。しかし彼には、そのような種類の作品を書き続ける以外に、作家として生きる道は見つけられなかったし、作家として生きることがかなわなければ、彼の人生はもはや意味を持たなくなっていた。」(14)

芥川研究者である関口は、先の村上による歯車評を「的確な評である」とした上で、こう述べている。

「『歯車』には、芥川の人生の総決算が託されていたのである」(15)。

物語の主人公は、作家本人と思しき〈僕〉。主人公は或避暑地から知人の結婚披露宴のため東京に出て、そのままホテルで執筆を続けつつ、絶えず強迫観念に脅かされて街を彷徨い、カフェや書店へと逃避し、再びホテルで原稿用紙と向かい合い、やがてまた或避暑地に戻っていく。作中、〈僕〉にとっての不安や不吉、痛みを表象する語がさまざま散りばめられているのが特徴的である。題名とされた〈歯車〉からして、そうした語の一つだ。

> のみならず僕の視野のうちに妙なものを見つけ出した。妙なものを？——と云ふのは絶えずまはつてゐる半透明の歯車だつた。僕はかう云ふ経験を前にも何度か持ち合せてゐた。歯車は次第に数を殖やし、半ば僕の視野を塞いでしまふ、が、それも長いことではない、暫くの後には消え失せる代りに今度は頭痛を感じはじめる、——それはいつも同じことだつた（112 頁）(16)。

このような〈歯車〉をはじめとする不吉な語が多種、しかも繰り返し現れる。そして、こうした語らの暗合と集積とによって、おぼろなスピリチュアルペインが徐々に形を取り始め、最後には堅牢な獄屋となって、〈僕〉を死へと囲い込む。あたかも一片では何ものをも表し得ないジグソーパズ

ルのピースが、やがてくっきりとした形相を構築するように。併せて『歯車』には、スピリチュアルペインの特徴的な表出形態である、超越者（例えば神）への呪詛や願いも描写されている。超越者との断絶が決定的となった時、やはり〈僕〉はスピリチュアルペインの檻の中で死をのみ待つことになるのである。こうした経緯がきわめて明晰な筆致で示されている。

芥川龍之介が世界文学史上高い評価をいただく作家の一人であることに疑義を差し挟む余地はない。同時に『歯車』という彼の小説が、作家として、また人としての芥川の生涯の、死へと向かう誘惑と苦悩とに支配された時間を凝縮した物語であることもまた確かである。加えて『歯車』は、そこにスピリチュアルペインの顕れを見つめるにふさわしい論理性、知性、分析可能性を完備している。

本作を、スピリチュアルペインの顕れを看取し、かつそこに顕れたスピリチュアルペインが死をもってのみやわらぎ得る類の痛みであると証左するための、適切なテクストであると判断したのは、上記の理由によるものである。

2.「不吉語」の集積、あるいは顕在化していくスピリチュアルペイン

スピリチュアルペインは、死に近接することで、自己の継続性や一貫性、同一性が瓦解し、自らの存在意義や生きる意味、希望が失われて生じる痛みである。本論では、あえて細かいカテゴライズを抛擲して、この比較的大振りな器をもって、『歯車』というテクストのうちに、スピリチュアルペインをすくい取っていくこととする。そうするとこの器の底に、いくつかの語が、死によってのみやわらぎ得るスピリチュアルペインを形作るパズルのピースとなって、沈潜しているのが透かし見えるのである。

(1) 自死の表象としての不吉語、〈レエン・コオト〉

『歯車』の文量は、400 字詰め原稿用紙 70 枚ほど。一 レエン・コオト、二 復讐、三 夜、四 まだ？、五　赤光、六 飛行機　の全 6 章だてである。

物語らしい物語はそこに存在せず、「僕」の心象風景が、村上も言うように「どこまでもスタイリッシュにそがれた文体」[17]で描出される。とりわけ、迫り来る死の表象と思しきことば—これを本論では〈不吉語〉と呼ぶ。もちろん、語そのものが不吉なのでなく、その語が〈僕〉に不吉を呼び起こすのである—の多用されているのが印象的だ。

不吉語は、一つだけでは、ただの不吉である。しかしながら、それが二つ、三つと暗合し、五つ六つと集積し、七つ八つと凝集することにより、主人公を死に追い詰める檻となる。死の虜囚となった「僕」は、ついに絶望的なスピリチュアルペインの叫びを上げる。

不吉語の一つが、先に掲出した〈歯車〉であり、また〈レエン・コオト〉だ。

物語の幕開けとなる「一 レエン・コオト」の書き出しは、以下のとおりである。

> 僕は或知り人の結婚披露式につらなる為に鞄を一つ下げたまま、東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばした（106頁。傍線筆者、以下同様）。

車中、乗り合わせた理髪店主から、〈僕〉は〈レエン・コオト〉を着た幽霊の話を聞く。

> 「妙なこともありますね。××さんの屋敷には晝間でも幽霊が出るつて云ふんですが。」
>
> 「晝間でもね。」
>
> 僕は冬の西日の當たつた向うの松山を眺めながら、善い加減に調子を合せてゐた。
>
> 「尤も天気の善い日には出ないさうです。一番多いのは雨のふる日だつて云ふんですが。」
>
> 「雨のふる日に濡れに来るんぢやないか？」

「御常談で。……しかしレエン・コオトを着た幽霊だつて云ふんです。」（106–107 頁）

その後、〈レエン・コオト〉は、〈僕〉の憑きものとなる。

「するとレエン・コオトを着た男が一人僕等の向うへ来て腰をおろした。僕はちよつと無気味になり、何か前に聞いた幽霊の話をＴ君に話したい心持ちを感じた。」（111 頁）

いくら逃れようとしても、〈レエン・コオト〉は行く先々で不気味な姿を見せる。

「レエン・コオトは今度も亦僕の横にあつた長椅子の背中に如何にもだらりと脱ぎかけてあつた。」（115 頁）

〈レエン・コオト〉は幽霊、すなわち死者の訪れであり、自らが迎えようとしている自死の表象でもある。実際テクスト中には直截、〈自死〉と〈レエン・コオト〉とが結節された箇所もある。〈僕〉はホテルの部屋で義理の兄が自死したとの連絡を受けるのだが、その際、「僕の姉の夫はその日の午後、東京から餘り離れてゐない或田舎に轢死してゐた。しかも季節に縁のないレエン・コオトをひつかけてゐた」（118 頁）のである。

続いて最終章「六 飛行機」の冒頭部分を見てみよう。

> 僕は東海道線の或停車場からその奥の或避暑地へ自動車を飛ばした。運轉手はなぜかこの寒さに古いレエン・コオトをひつかけてゐた。僕はこの暗合を無気味に思ひ、努めて彼を見ないやうに窓の外へ目をやることにした（160 頁）。

この書き出しは、物語の最初、「一 レエン・コオト」の始まりと、完璧

に照応している。

先に、〈僕〉は「東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばし」、今度、〈僕〉は「東海道線の或停車場からその奥の或避暑地へ自動車を飛ばし」ている。そして〈レエン・コオト〉は再び〈僕〉の眼前に現れる。芥川も記すように、不気味な暗合である。

〈レエン・コオト〉を避けるため窓外の景色に目を転じた〈僕〉は慄然とする。「低い松の生えた向うに、――恐らくは古い街道に葬式が一列通るのを見つけた」（160 頁）ためだ。〈レエン・コオト〉という死の表象から目をそらしても、そこに現前するのは〈葬列＝死〉である。東京の夜を離れて、田舎の避暑地に戻ってきても、場を支配するのは、ひたすら死のイメージなのである。間断なく襲ってくる不吉な思いの内に絶望的なスピリチュアルペインが立ち上ってくる。

(2) 安全を脅かす不吉な色彩語と痛みを増幅する種々の不吉語

『歯車』には色彩を表す不吉語もいくつか用いられている。

〈黄いろ〉はその一つである。なぜ〈黄いろ〉が不吉であるのか、それは以下のように説明されている。

> タクシイは容易に通らなかつた。のみならずたまに通つたのは必ず黄いろい車だつた。（この黄いろいタクシイはなぜか僕に交通事故の面倒をかけるのを常としてゐた。）そのうちに僕は縁起の好い緑いろの車を見つけ、兎に角青山の墓地に近い精神病院へ出かけることにした（127 頁）。

つまり〈緑いろ〉は、〈黄いろ〉とは逆に〈僕〉の安全を保証する色である。ところが、ようやくつかまえた緑いろのタクシイに乗っても〈僕〉は「イライラする、—tantalizing—Tantalus—Inferno……」（127 頁）と、罪ゆえ地獄に落ちたギリシア神話のタンタロスを想起し、「タンタルスは實際硝

子戸越しに果物を眺めた僕自身だつた」と自らを虐遇するのである。しかもホテルに戻ると、またも〈レエン・コオト〉が〈僕〉の前に姿を現す。

> 〈……〉このホテルの玄関へおりると、レエン・コオトを着た男が一人何か給仕と喧嘩をしてゐた。給仕と？——いや、それは給仕ではない、緑いろの服を着た自動車掛りだつた。僕はこのホテルへはひることに何か不吉な心もちを感じ、さつさともとの道へ引き返して行つた」（128 頁）。

ここでは、「〈緑いろ〉＝〈僕〉の安全」を、「〈レエン・コオト〉＝死」が脅かしており、それゆえ〈僕〉は不吉な心もちとなって、もとの道へと引き返すのである。〈僕〉は、〈レエン・コオト〉、すなわち自ら迎えんとする死を回避しようと、無意識裡に抗うのだ。

そして再び〈黄いろ〉は、物語の終盤近く「六 飛行機」の章内で再び鮮烈に現れる。避暑地に戻った〈僕〉が、妻の実家の庭先で妻の母や弟と世間話をしている、その時である。

> そこへ僕等を驚かしたのは烈しい飛行機の響きだつた。僕は思はず空を見上げ、松の梢に触れないばかりに舞ひあがつた飛行機を発見した。それは翼を黄いろに塗った、珍らしい単葉の飛行機だつた。〈……〉／『あの飛行機は落ちはしないか？』」（164 頁）。

不吉な、〈黄いろ〉い翼を持つ飛行機の轟音に驚かされて、〈僕〉は思わず「落ちはしないか」と口に出す。

直前の「五 赤光」において、東京の夜を彷徨する〈僕〉は、「自動車のタイアアに翼のある商標」を見つけ、「人口の翼を手よりにした古代の希臘人を思ひ出し」（154 頁）、突然不安を感じるのであった。もとよりその

希臘人とは、蝋で固めた翼で自由に空飛ぶ力を得たものの、太陽に近づきすぎたために失墜し、命を落としたあのイカロスのことである。不吉な、〈黄いろ〉い人口の翼を持つ飛行機を目の辺りにして、「落ちはしないか」と口をついて出たのは、すなわちイカロスを連想したためであり、また〈僕〉自身がまさしくイカロスのように失墜しつつあることを肌身で感じたためでもある。

他にも本作では、〈赤い光〉、〈Black and White〉といった色彩語が、不吉の表象として〈僕〉を責めさいなむ。さらには、今ここで見た〈翼〉に加え、〈鏡〉、〈硫黄〉、〈もぐらもち＝ Mole（英語のもぐらもち）＝ la mort（仏蘭西語の死）〉、〈Doppelgaenger（二重身）〉といった言葉が、不安や苦しみを表す不吉語として頻出する。加えて、トルストイの『ポリクーシカ』、『希臘神話』、ストリンドベルグ『伝説』、フロベール『ボヴァリイ夫人』、志賀直哉『暗夜行路』、ドストエフスキイ『罪と罰』、斎藤茂吉『赤光』、芥川自身による『侏儒の言葉』、『地獄変』などの書物までもが、一種の不吉語となって〈僕〉の苦しみを倍加する。〈僕〉の魂は鋭利な不吉語に切り裂かれ、やがて耐え難い痛みと共に死へ追いつめられていく。

村上の評した「自らの人生をぎりぎりに危ういところまで削りに削って、もうこれ以上は削れないという地点まで達したことを見届けてから、それを改めてフィクション化したという印象がある」というのは、芥川がこのように多様な不吉語を精緻に暗合化することで、苦しみの心象風景を巧みに描き出したことへの賛辞に他ならない。自らの苦しみをいったん俯瞰し言語化した上で、再び苦しみの風景の中へと我と我が身を点描していく、その透徹した作業のうちに、小説家としての矜持と、圧倒的な苦悩との相克を見たのである。

(3) 痛みの前駆、視界を覆い尽くす無数の「歯車」

〈レエン・コオト〉同様、〈僕〉を苛む不吉語が先述の〈歯車〉だ。なおこの題名は、もともと『歯車』だったわけではなく、当初『ソドムの夜』

であったところ、『東京の夜』、『夜』と変遷し、最後に佐藤春夫の提言によって『歯車』とされた[18]。佐藤が最初の1章を読んで、『歯車』としたらどうかと薦めると、芥川はすぐさま題名を書き直したのである。

さて、第1章の終わりごろ、ホテルへと向かう〈僕〉の描写である。

> 僕は省線電車の或停車場からやはり鞄をぶら下げたまま、或ホテルへ歩いて行つた。往来の両側に立つてゐるのは大抵大きいビルデイングだつた。僕はそこを歩いてゐるうちにふと松林を思ひ出した(112頁)。

この直後、半透明の〈歯車〉が〈僕〉の視界を半ば塞いでしまうほどに増殖する。こうした〈歯車〉の出現は、頭痛の前駆症状だ。仮構の痛みである〈歯車〉が視界から消えて後、〈僕〉は続いて現実の痛み、頭痛に襲われる(実際芥川は閃輝性暗転という偏頭痛の前兆に悩まされていたようで、その意味で「歯車」は仮構でなく、現実であるとも言えよう)。

なお上記引用文中、〈ビルデイング〉と対置される〈松林〉もまた不吉な語として頻出しており、それはどこか墓標を想起させる。

次に〈歯車〉が現れるのは、東京から或避暑地へと戻って、あの黄色い、人口の翼を持つ飛行機の轟音に痛苦の思いを強くした、その後である。かつて東京で〈ビルデイング〉に〈松林〉≒墓標を想起し、しかる後に〈歯車〉を見出したのと同じように、「僕は枝一つ動かさない松林の中を歩きながら、ぢりぢり憂鬱になつて行った」(165頁)。さらに、ブランコのないブランコ台を見かけて絞首台を連想し、四度声を上げる鴉に遭遇して不安を募らせ、自転車に乗る見知らぬ男の姿に轢死した義兄を重ねあわせ、小みちの真ん中に〈もぐらもち(mole)〉の骸を発見して〈la mort(死)〉を幻視する。こうして逃げ場はどんどん閉ざされていく。

> 何ものかの僕を狙つてゐることは一足毎に僕を不安にし出した。そ

こへ半透明な歯車も一つづつ僕の視野を遮り出した。僕は愈最後の時の近づいたことを恐れながら、頸すぢをまつ直にして歩いて行つた（167 頁）。

やがて、〈僕〉は烈しい頭痛をこらえて自宅の 2 階で休んでいる。〈歯車〉はどうやら消えたらしい。しかし、代わってまぶたの裏には「銀色の羽を鱗のように畳んだ翼が一つ」見え始めるのだった。いよいよ〈失墜＝死〉の時は近づいているようだ。

そこへ、誰か梯子段を慌しく昇ってきたかと思うと、すぐまた駆け下りていった。それは〈僕〉の妻である。〈僕〉は痛みをこらえて妻に声をかける。

「どうした？」
「いえ、どうもしないのです。……」
妻はやつと顔を擡げ、無理に微笑して話しつづけた。
「どうもした訣ではないのですけれどもね、唯何だかお父さんが死んでしまひそうな氣がしたものですから。……」
それは僕の一生の中で最も恐しい経験だつた（168 頁）。

死が自らの妄想でなく、ついに他者の目において自明となった、これはその瞬間である。この後、〈僕〉はこの先を書き続ける力を持っていない、と告白し、芥川は「かう云ふ気持ちの中に生きてゐるのは何とも言はれない苦痛である」（168 頁）と書き付ける。ついにさまざまな不吉語は凝固して、〈僕〉の息の根を止める寸前に至る。そして、このような気持ちの中に生きていることの名状しがたい苦痛、〈僕〉の、芥川自身の絶望的なスピリチュアルペインが顕在化するのである。

なお、上記〈僕〉と妻とのやりとりは、後に芥川の妻、文による追想記において「真実」[19] のことであったと記されている。

3. 超越者への希望と謝絶の狭間でわき上がるスピリチュアルペイン

スピリチュアルペインに特徴的な痛みの表出内容として、超越者への問いかけがある。

たとえば〈僕〉は、トルストイの『ポリクーシカ』を読んで、この小説の主人公が「僕の一生のカリカテュアだつた」と思いなし、「窓かけの垂れた部屋の隅へ力一ぱい本を抛りつけ」、「くたばつてしまへ！」（121 頁）と大声をあげる。ポリクーシカは、酒癖と盗癖ゆえに周囲から蔑まれる農奴である。改心を誓って女主人から金銭の受領を任されるが、途中で金を落としてしまい、首をつって果てる。「くたばつてしまへ！」は、「虚栄心や病的傾向や名誉心の入り交つた、複雑な性格の持ち主」であるポリクーシカに対する、そして〈僕〉自身に対する呪いの詞なのである。その後、部屋にいたたまれなくなった〈僕〉は、「牢獄のやうに憂鬱」な廊下に出て、階段の上り降りを繰り返し、迷い込んだコック部屋で、「僕の堕ちた地獄を感じた。『神よ、我を罰し給へ。怒り給ふこと勿れ。恐らくは我滅びん。』――かう云ふ祈祷もこの瞬間にはおのづから僕の唇にのぼらない訣には行かなかつた」（122 頁）と独白するのである。

死に近接する人の多くは、「神も仏もあるものか」と何ものか超越的な存在に対して、自らの境遇を呪ってみせ、「神様、もしもおられるなら助けてください」と救いを求め、あるいは「仏様、死んだら私も仏になることができるのですよね」と死後の幸いを冀う。〈僕〉が、この物語のなかで唯一、自ら進んで会いに行くのもまた、超越的存在と〈僕〉とを架橋する人物であった。それは「或聖書會社の屋根裏にたつた一人小使ひしながら、祈祷や読書に精進してゐた」（148 頁）老人だ。

二人が交わす会話の内に、〈僕〉が抱える、いかんともしがたい両価性が浮かび上がる。

「如何ですか、この頃は？」
「不相変神経ばかり苛々してね。」

「それは薬では駄目ですよ。信者になる気はありませんか？」
「若し僕でもなれるものなら……」
「何もむづかしいことはないのです。唯神を信じ、神の子の基督を信じ、基督の行つた奇跡を信じさへすれば……」
「悪魔を信じることは出来ますがね。……」
「ではなぜ神を信じないのです？　若し影を信じるならば、光も信じずにはゐられないでせう？」
「しかし光のない暗もあるでせう。」
「光のない暗とは？」
僕は黙るより外はなかつた。彼も亦僕のやうに暗の中を歩いてゐた。が、暗のある以上は光もあると信じてゐた。僕等の論理の異るのは唯かう云ふ一点だけだつた（149-150 頁）。

この短いダイアローグの中には、スピリチュアルペインに特徴的な、「超越者に向かう救済の願い」と「超越者への呪詛」とがないまぜになっている。

芥川は、『歯車』を執筆後、新訳聖書の福音書に基づいた『西方の人』を著している。その冒頭で彼は、「わたしは彼是十年ばかり前に藝術的にクリスト教を—殊にカトリック教を愛してゐた」と綴り、「それから又何年か前にはクリスト教の為に殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じてゐた」と述べた後に、「わたしはやつとこの頃になって四人の傳記作者のわたしたちに傳えたクリストという人を愛し出した」[20] と吐露している。キリスト教に審美的な魅力を感じた段階を経て、殉教者の心理に共感し、そして現時点では福音書記者の記したキリスト像を愛し始めたというのだ。少なからぬ信仰への希望がそこにある。『西方の人』の脱稿は自死の2週間ほど前のことであり、続編である『続西方の人』は絶筆（芥川の記述では自死前日）である。際の際におけるこの告白は、芥川が危機的状況にあって—あるいは、スピリチュアルペインの苛みにあって—超越者を欲

していたことの証左とも考えられよう。

かくして死の枕元には聖書が置かれていたが、しかし、芥川がキリスト教に救いを求めて信仰を証しする時はついに訪れなかった。

芥川同様、〈僕〉もまた、老基督教信者の「信者になる気はありませんか」ということばに、「若し僕でもなれるものなら」といったんは恭順の意を示す。示しながらも、「悪魔を信じることはできますがね」と突き放してしまう。その理由は、老人と〈僕〉との間に、根本的な相違、絶対的な隔たりがあるためだった。

老基督教信者も、〈僕〉も、同じように闇の中を彷徨している。その意味で、老基督教信者も〈僕〉も立場は変わらない。しかし、闇のある以上は必ずどこかに光があると老基督教信者が信じているのに対して、〈僕〉は決して光の存在を信じることがない。自ずと信仰に至る道は遮蔽されており、「僕は黙るより外はなかった」のだ。

かくして、物語の最後を、芥川龍之介は次の一文で締めくくる。

> 誰か僕の眠つてゐるうちにそつと絞め殺してくれるものはないか？（168 頁）。

これは本作における紛れもないスピリチュアルペインの顕現と考えられないだろうか。しかも、この痛みは、もはや死をもってしかやわらぎ得ない。

『歯車』の筆を置いて 4 ヵ月近く、芥川は自死を遂げた。遺書によれば、自死の決断は「過去の生活の総決算のため」であり、その中でも「二十九歳の時に秀夫人と罪を犯したこと」が大事件で、「今僕が自殺するのは一生に一度の我儘かも知れない」とされている。また、「畢竟気違ひの子だつたのだろう。僕は現在は僕自身には勿論、あらゆるものに嫌悪を感じている」とも [21]。芥川の自伝的な作品の一つ、『点鬼簿』の書き出しが「僕の母は狂人であった」とあるその通り、実母フクは彼が生後数ヶ月の頃に精神に変調を来し、11 歳のときにこの世を去っている [22]。芥川龍之介の

自死の理由には、この発狂への不安、女性問題、創作のいきづまりなど、さまざま取りざたされているが、ここではそれ以上云々しない。ただ、その死が、死によってのみやわらぎ得るスピリチュアルペイン、すなわち死に到る病の果てに訪れたものであることを確認するまでである。

絶望的なスピリチュアルペインから解放された芥川龍之介の様子を、妻の文はこう回想している。

> 私は、主人の安らぎさえある顔（私には本当にそう思えました）をみて、
> 「お父さん、よかったですね」
> という言葉が出て来ました。
> 私の言葉を聞かれた方は、冷たい女だと思われたことでしょうが、私は、主人の生きてゆく苦しみが、こんな形でしか解決出来ないところまで来ていたのかも知れないと、思ったからです。
> 死に近い日々は、責苦の連続のようでした。今はどんなにかその苦痛が去り、安らかな思いであろうかと思いました[23]。

『歯車』の主人公は、まだ死していない。死に幽閉され、絶望の際に佇んではいるものの、死は実行されていない。しかし、「かう云ふ気持ちの中に生きてゐるのは何とも言われない苦痛である」と感じ、眠っている間に誰かに首を絞めて殺してほしい、と、願っている。いったいその「誰か」とは誰なのか？ それは神なのか。神に対する最後の希望なのか、それとも誰でも構わない、という虚無的な願いなのか。

〈僕〉に救いの光はない。光なき闇の無辺に広がるばかりである。

おわりに

芥川の『歯車』には、名状しがたい不安に脅かされ、やがて死へと追い詰められる過程が、多彩で印象的な不吉語の暗合と集積とによって明示さ

れている。かつ、超越者の救済を期待しながら、なおも一筋の光さえ闇の内に見出し得ない絶望的な〈僕〉の苦悩が描出されている。スピリチュアルペインは顕在化し、暗黒の、無音の獄屋に縛り付けられた〈僕〉＝芥川は、「誰か、僕を殺してくれ」と一人ごちる。私は、自死を、致し方なし、と容認するものではない。スピリチュアルケアに日々心血を注ぐ人たちの努力を軽視するものでも、当然ない。しかしながら、生の耐え難い苦痛に苛まれ、超越者による救済さえもが断絶した時、死をもってしかやわらぎ得ないスピリチュアルペインが顕在化する、ということを芥川龍之介の『歯車』は、私たちに教えてくれるのではないか。

「ボヴァリー夫人は私だ」と小説『ボヴァリー夫人』の作者フロベールが語ったように「文学とは作者がその体験を語るもの」[24] である。またはその特殊な体験を「特殊性に即して追究しながら、普遍的なものにまで高めること－それこそ文学の方法」[25] である、と言うこともできる。つまり、千差万別個別固有のスピリチュアルペインの特殊体験が、文学の方法を通して、普遍的なものへと変換される可能性がある。今後も、文学作品のうちに、さまざまなスピリチュアルペインのありようを見出していきたい。

注

（1）Saunders, Dame Cicely, *The philosophy of terminal care*（1984), Saunders, Dame Cicely Ed., *The Management of Terminal Malignant Disease (2nd ed.)*, Edward Arnold, p.232.

（2）淀川キリスト教病院ホスピス編（2007年）『緩和ケアマニュアル第5版』最新医学社、205頁。

（3）同書 207-209 頁。

（4）Quill, Timothy E., et al. (2010), *Primer of Palliative Care (5th ed.)*, American Academy of Hospice and Palliative Medicine, p.97.

（5）村田久行（2011 年）「終末期がん患者のスピリチュアルペインとそのケア」『日本ペインクリニック学会誌』（18）1 号、1 頁。
（6）窪寺俊之（2004 年）『スピリチュアルケア学序説』三輪書店、43 頁。
（7）阪倉篤義校訂（1970 年）『竹取物語』岩波書店（岩波文庫）、54 頁。現代語訳は私訳。
（8）伊藤整（2004 年）『改訂文学入門』講談社（講談社文芸文庫）、207 頁。
（9）神津拓夫（2008 年）『作家 その死』近代文芸社、154–156 頁。
（10）関口安義（2012 年）『芥川龍之介新論』翰林書房、9–10 頁。
（11）宮坂覺（1999 年）「『歯車』〈ソドムの夜〉の彷徨」『河童・歯車 晩年の作品世界 芥川龍之介作品論集成第 6 巻』翰林書房、192 頁。
（12）Rubin, Jay, *Translator's Note* (2006), Rubin. Jay Ed., Akutagawa, Ryunosuke, *Rashomon and Seventeen Other Stories*, Penguin (Penguin Classics), ジェイ・ルービン（2007）「芥川龍之介と世界文学」（畔柳和代訳）、ジェイ・ルービン編、芥川龍之介『芥川龍之介短編集』新潮社、26 頁。
（13）Murakami, Haruki, *Introduction Akutagawa Ryunosuke: Downfall of the Chosen* (2006), Jay Rubin, Ed., Akutagawa, Ryunosuke, *Rashomon and Seventeen Other Stories,* Penguin(Penguin Classics), 村上春樹（2007 年）「芥川龍之介—ある知的エリートの滅び」、ジェイ・ルービン編、芥川龍之介『芥川龍之介短編集』新潮社、44 頁。
（14）同書 44–45 頁。
（15）関口前掲書、211 頁。
（16）芥川龍之介（1929 年）「歯車」『西方の人』岩波書店、112 頁。（　）内は、同書よりの引用頁数（以下、同様）。引用文中ルビは省略した。
（17）村上前掲書、44 頁。
（18）宮坂前掲書、193 頁。
（19）芥川文、中野妙子記（1981 年）『追想 芥川龍之介』中央公論社（中公文庫）、9–10 頁。

(20) 芥川（1929 年）「西方の人」『西方の人』岩波書店、212 頁。
(21) 芥川龍之介(1998 年)「遺書」『芥川龍之介全集第 23 巻』岩波書店、84 頁。
(22) 神津前掲書、158 頁。
(23) 芥川文前掲書、170 頁。
(24) 加藤周一 (1971 年)『文学とは何か』角川書店、20 頁。
(25) 同書、36 頁。

（立教大学大学院キリスト教学研究科キリスト教学専攻博士課程後期課程・
JICE 研究員）